

ペスタロッチ『探究』の方法と思想

—研究動向，成立過程，社会批判—

宮 崎 俊 明

(1981年10月15日 受理)

Zu J. H. Pestalozzis „Nachforschungen“

—besonders über die bisherigen Forschungstrends, Vollendungsprozeß und hermeneutischen Gesichtspunkt—

Toshiaki MIYAZAKI

I. 問題の所在と課題

ペスタロッチはその理論の実践と実践の理論を示す『探究』（『人類の展開における自然の道程についての私の探究』）について、『白鳥』では書名を示すにとどめ（28. 242）¹⁾、1821年のコッタ版収録のあとがき補註には「当時の嘆きの歌」²⁾としているが、『ゲルトルート』では3年の労苦をもって、自然感情、権利、道徳の三者の調和をはかろうとしながら、結果は実践への努力を怠った無力の証拠と単なるすさびにすぎなかったと、きわめて否定的な記述を残している。また冒頭の献辞の相手と目される、ヘルヴェチア共和国での新人(Novi homines)指導層のひとり D. Fellenbergからも叙述の混乱を指摘され³⁾、数多くの読者は書物全体を駄弁とみたという（13. 185 ff., cf. B. S. 525）。

この『探究』、『シュタンツ』、『ゲルトルート』のあいだにあるのは、教育実践の結晶過程なのか。それとも A. Rang のいうごとく政治での「破綻」と教育への「敗走」だったのか⁴⁾。先行研究での把握は分岐するが、それは主に次の二つに由因している。ひとつにはペスタロッチ把握の視点や方法が教育学理論の動向とともに変遷し、今世紀のペスタロッチ像はナトルプの社会的教育学のもの以来、精神科学、人間学、批判理論、社会（思想）史、精神分析などからする立場やそれらの混合型による接近で異なってきたこと⁵⁾。また分析の方法論上の立場自体が、イデオロギーの知識社会学的前提をはらんでいたことも否めず、その立場の相違で他と対立し孤立する危険があったのも事実である。『探究』は政治と教育をめぐる実践や理論の把握の差で各様に位置づけられ、教育が政治に従属したとき反政治的なものとして否定的に評価される傾向性もみえたし、逆に教育の倫理性が前面に出て政治社会的状況から切離されたときは積極的評価をえて浮上した。なおひとつには思考の生成過程を執筆期の3年間に限定するのではなく、80年代中葉からの10余年に拡大しその間のとくに『読書ノート』と『探究草稿』のもつ豊かな内容に注目するかしないかの差。これらを未定稿のゆえに軽視したり看過するのではなくむしろ徹底的に踏査した解釈をするしかないかの慎重さ

と安易さの差があった。

たとえば『探究』のタイトルについては、85年末段階に「指導の一般理論」(B. 648)や『ノート』での「人間試論」としたものに關係があり、成稿の直前でも「人類の発展」ではなくて「人類の指導における人間の自然の探究—再び民衆の本—」(Bd. 12, S. 508)としたごとく、その意味の内容は決して一義的ではない。また成稿の前後の連続と非連続や「媒介」を云々する前にその過程になお踏査すべき重要な問題がはさまれており、当時の彼がいかなる書物からも影響をうけていないかのごとく語る直接的証言(8. 293; 13. 196)すら、実は事実と反するのである。したがって、執筆をめぐる表裏両面の事情や教育の実践理論と研究の理論実践の基礎的連関を十分念頭におく必要があるし、さらにこの作品の企画から執筆までには3年といわず10余年に及ぶ期間があり、その間に思想上の影響、拡充、変転を示す事実があるのである。

また、かかる文献批判上の問題のほか従来の先行研究がみせてきた歴史的な位置づけや評価についてその研究を規定した諸条件をめぐる問題事実がある。それらは世界観、イデオロギー、教育運動・政策の方向を染め出し、それと教育学の潮流や哲学思想の動向とのからまりもみせるからである。問題の事象へ真に迫りうるためには、実証主義的手法への批判的問題提起、研究実践の底流にある知の支配的類型、認識論に知識社会学的に接近する問題性、これらにも留意しておく必要がある。教育実践に対するペスタロッチ自身の解明は、社会の認識論としての思想の水準やそれを規定しているコミュニケーションの關係構造、さらに実存の自己反省や無意識的投射の契機に規定されている解釈行為だからである。それゆえ本稿でのわれわれの作業課題の前段として、まず先行研究の基本視点とそこでの『探究』の位置づけを確認してとるべき進路を設定し、次にこの著作の主題と方法が成熟していく過程での『ノート』と『草稿』のもつ意味を整理しておく必要がある⁶⁾。

II. 先行研究における『探究』の位置づけ

(1) 後期新カント主義のマルブルグ学派の中心だった P. Natorp は教育学の哲学的基礎づけとその「文化再建」への意義という実践的意図をもち、ヘルバルト派による教育の教授論的限定に反発し^{レフナルムベグゴキーク}教育改革運動に連なる社会的教育学を推進した。そしてペスタロッチに対して W. Rein が指摘した非体系性や A. Heubaum による歴史的接近と心理学化に抗しながらむしろカントの認識論やそのドイツ観念論との共通の地盤を強調し、それがもついわば協同体的な文化国家の再建の実践を崇拜に近い形で賞揚した⁷⁾。そこでナトルプは『探究』の状態の三段階^{ツスダンド}をカント的格率の不在と他律と自律^{アノミー ヘテロミー アウトノミー}の発展段階とし、この作品からペスタロッチ教育学の五原理のうち「自発性」の核心、^{メトード}「方法」の弁証法的進行過程、^{ゲマインシャフト}「社会」のための社会哲学を抽出した⁸⁾。しかし彼のパスは歴史的事実關係の実証を軽視したし、L. Froese のいうごとくペスタロッチを神話の域に入れその後「宣教者」を輩出させる端緒を作ったのもほかならぬ彼だったのである⁹⁾。

(2) ナトルプが占めた教育学の主流はこのあと W. Dilthey とその学派に交代され、教育実践の主体がその生の中核と統一性と背景をいかなる精神科学的構造で示しかつ精神史的連関で形成

するか、という実践全体の客観的形成要因の究明がすすめられる。そして主体の実践を規定する客観的連関としての文化を重視し、政治的要因をもそのもとに入れた。ペスタロッチの実践契機としては次のごときもの、つまり政治的民族主義でなく非正統的ですからある宗教性、ドイツ・イデアリスムの系譜よりもむしろ中世的神秘主義と古代的禁欲主義、経験論的超越論的自然でなく神学的自然や自己告白のために対象化される内在的心理的自然、さらには重農主義的地平の産業的合理主義やプロテスタンティズムの歴史哲学への傾斜、フランス革命の政治主義への反発、総じてこれらの統一原理として神秘的文化意志が指摘された。したがって、『探究』におけるたとえば自然状態、自律、死の跳躍等の主要概念の、ルソー、カント、フィヒテ、シャフツベリー、ヤコービからの影響が強調され¹⁰⁾、この作品は二元的自然をモチーフとした文化哲学の第四段階の完成の書や宗教的人間の倫理の書¹¹⁾、さらには歴史哲学の書とされ¹²⁾、また経済的幸福論の二元論の克服と道徳的愛の構想とされたりした¹³⁾。そこではその前後の時期の研究のごとくペスタロッチを現代へひきつける理解や評価には消極的となり、そのかぎりでの知的生産性をあげた。しかし30年代に粗雑な政治的傾向性が教育科学の名のもとに教育なき政治関係へ進むに至ったとき、沈黙か黙認の瀬戸際に立たされた。

(3) ペスタロッチへの大戦直後の接近では理論的関心から実践的関心へ、精神史から思想史への移行をみせ、歴史の主体としての彼の政治や教育への態度価値とその底にある実存の構えが注目された。人々は彼が直面した市民と国民、社会と国家との間の亀裂を追体験し、西独での政治からの後退、スイスでの政治への勇氣、東独での政治的ユートピアの評価といった対応の差をみせた。その後60年代半ばまでの学界の主流は実存哲学と現象学の影響下で推進された人間学的接近となる。そこには W. Bachmann や Th. Ballauf のごとき存在論的解釈学的人間学の高踏的立場と、スイスに多い実際的にして啓蒙的な通俗的傾向の二型がありながら、主題上では両者とも社会的世界と心術・思考と実践といった共通の問題圏に入っていたし¹⁴⁾、精神史から出発した者もそこへ傾斜した (H. Schönebaum, A. Stein, K. Silber, H. Barth, U. Bühler¹⁵⁾)。概して社会性を実存的単独性ないし本来性の人間学のもとに把え、『探究』に網羅されている概念を構造化しそれを現象学的人間学の尺度で分析し再構成する作業に着手した。そしてそのかぎりでの成果もみせたが、反面では歴史的なものを共時化する強引さと極度に単純化した図式化に傾斜する性急さもなぐはなかった。

(4) しかし、60年代に入るや胎動しつつあった哲学の社会科学化や社会学内部の方法論論争による社会哲学への傾斜などは、とくに人間存在の統合的基礎構造を問う哲学的人間学に影響したためにそれに依拠してきた教育学も影響を受けずにおかなかった。また社会理論や教育的利害の問題と連係せぬ精神史的研究ないし歴史主義の全体論的な把握に具体性を付与するために社会史的分析と弁証法論理が導入され、歴史事実を捨象しがちな人間学的概念装置による方法はむしろ廃棄が求められた。「人間学的還元」をすすめる人間学的教育学はその狭さと孤立のゆえに、教育の理論—実践連関の基底の把握には現実的にも論理的にも不十分である。そこで「人間学的転回」の書とさ

れる『探究』をむしろ反人間学的に社会学と社会史の文脈に入れ、教育と政治、理論—実践問題の視角から精力的かつ批判的に位置づけたとしたのが、A. ランクである。彼には『探究』をバウマンが現象学的に「本質を直観する」方向で進め浮上させた人間学的研究とは逆にむしろ客観的に「政治哲学」の書と解し、その認識が社会的歴史的に媒介されていること (S. 10¹⁶⁾)。

『探究』の思惟形式はその著者の実践的政治的衝動との間にある矛盾の表現であり、それを人間学的な非政治的思考とするのは一面的であって、現実の問題事象を回避し隠蔽するに至ること (SS. 3, 65)。これらを軽視したために E. Spranger¹⁷⁾ や J. Toivio¹⁸⁾ らは「連続性の原理」や「状況思考とその危機」をもちだし調和論や諦観の境地へ帰着するペスタロッチを描き、Th. Litt の弁証法も特殊と一般の観念弁証法であって歴史分析を欠落させてしまった (SS. 73, 63)。F. Delekat, リット, バウマンらの人間学的視角からする「権力」の分析は反教育的なものとしての政治行動の論理を読みとり、権力と支配の人間像を摘出したのだが、ランクは『探究』に「教育がもつ政治的内容」あるいは「歴史的支配関係」を示す「具体的な核心」を示そうとし、先行研究には逆にそれを看過するものとして反発した (SS. 83, 7(アドルノの序文))。その点でランクは『探究』を絶対主義や革命へのいわば政治的黙示録とみなしながらそこに政治へのペシミズムとその同一物の裏面としての教育的オプティミズムという諦念から「希望」への救済契機が侵入していると、その政治の方向は保守的復古的に後退し、教育実践の方向は母親にシンボライズされる教育愛に収縮する必然性があったとした (12. 163, S. 149 ff.)。このランクの書物は従来の研究にはなかった成果を収めながらペスタロッチ像をいわば非神話化したきわめてポレーミッシュな問題提起の論著となった。

(5) そこで、マールブルクのフレーゼらのグループ (D. Kamper, D. Krause-Vilmar, H. Messmer, R. Pippert, G. M. Rückriem) は、「批判理論」の影響下にいるランクに一定の功績を認めながらも、同時に次のごとき限界を指摘することも忘れなかった。すなわちそのイデオロギー批判の立場の方法論的吟味に欠陥がめだち、たとえば思想の保守的と進歩的とをめぐる社会的有効性とその結果論的尺度や、精神科学的事象に対する非了解的発生論的発想が問題を含むこと (SS. 198, 55 ff.¹⁹⁾)。また実証的な先行諸研究の問題性にふれるさいの吟味と評価が不足し、A. Rufer などを軽視しすぎる (SS. 2, 22)。一方で社会的世界や弁証法を多義的に使用し、他方で教育への希望を挫折した政治行動の結果としながら、ありうべからざるものとしての内向した政治参加をするペスタロッチ像を仕上げることでむしろ教育の存立基盤を掘りくずしていること (Rang, SS. 61, 101; Froese, S. 163)。加えてそこにはランク自身のシニシズムがただよい対抗イデオロギーに墮して逆に説得力を欠くこと。『探究』の執筆直前のシュテューファー運動への言及や後期ペスタロッチの教育実践への解明に難があること (SS. 4, 37)。以上である。

このグループからみれば、ペスタロッチにはランクのごとくフランス革命が「政治的事件」ではなく「社会的事件」であり (S. 26)、その権利概念も政治的法的カテゴリーであるだけでなく心理的な幸福論を包含する (S. 43)。換言すれば、彼らがすえた視座には「政治的ペスタロッチ」から

「社会的ペスタロッチ」への転換があり、これと教育の理論との関係を探って抽出されたのは「社会一人格的ペスタロッチ」であり、加えて「教育学的ペスタロッチ」だった(SS. 19, 147)。したがって、ランクのように社会的、政治的なものに倫理的なものを完全にくみこみえないとするのがおおむねこのグループに共通した認識であり、そのためのテキスト批判が真正のペスタロッチ像を描き出す条件なのである(SS. 10, 165 ff.)。わけでもこのことは戦後スイスへ移った批判版全集の継続と書簡集13巻との編集刊行の中心であるE. Dejung²⁰⁾からの反論を前にして78年に「歴史的ペスタロッチ！」²¹⁾とした提起にも端的にあらわれている。このグループが求める解明の方法はその基調の総括者フレーゼの言を借れば「ヘルメノイティシエ 解釈学的—テキストクリティシエ 文献批判的方法と歴史—ヒストーリシエ 社会的—ゾチアールクリティシエ 社会批判的方法との総合批判的分析 (synkritische Analyse)」である(S. 11)。『探究』は政治的著述そのものではなくあくまで「政治の哲学」であり、さらに積極的には「民衆の実存解釈」である(S. 18)。またフランス革命に対する彼の実践のアポロギーとその客観的基礎づけを求める「社会的かつ人格的人間学の著作」(sozial- wie personalanthropologische Schrift)であり、その「社会人格的ペスタロッチの^{クレド}信仰告白」だった(S. 19)。

(6) 精神史が社会(思想)史で現実化されたのに似て人間学がリアリティを入手して社会関係と社会的行為の理論の層位を透視するには、いわば「深層解釈学」(ハバーマス)の視座も有効であろう²²⁾。ここにペスタロッチ研究が精神分析に着眼する可能性があった。また類型的にいうなら、精神分析的方法は社会学的ペスタロッチ研究をランクが遂行したのに比し心理学的方法として導入され、母子関係や教育関係のモデルや言語シンボルなどをめぐって適用された。なかでもH. Worm²³⁾は、B. Tollkötter²⁴⁾が人間学的研究から批判理論的研究への過渡期にペスタロッチとマルクスとの比較を労働・教育・社会のテーマで試みたのに似て、ペスタロッチをフロイトのもとにおき、その類似を強調する論述を進めた。彼らは共に弁証法的に論述し構造論的な解明を進めたが、ヴォルムは行為とその対象選択関係およびその自我形成のダイナミックスをもっぱら病理ないし頹落に焦点を合わせてとらえ、情動、社会、自我の形成過程をおさえた。その点で『探究』はもっとも重要な著作とされ、人間の感覚性と所有を指導的基礎概念としながら、政治と教育、社会と個人といった従来の分析構造とは異なるものを示した。

以上(1)～(6)の先行研究には、認識、歴史、社会、心理をめぐる基礎科学の適用のあとが確認できる。さらに集約すれば、(1)、(3)、(6)が構造論、(2)が過程論、(4)、(5)はおおむねその中間型というべきであろう。そして共通して『探究』はとりわけ重要な位置を与えられている。ペスタロッチ研究は基礎理論の登場やその深化と拡充、さらには新資料の発掘などに依存しながら変動してきたし、今後もするであろうが、以上にみたかぎりではなお次のごとき検討の余地を含んでいるといえる。

(1) 人間学的研究の功績は評価されるべきだとしても、ペスタロッチの理論実践の過程からすれば歴史的にも資料的にも問題をはらんでいる。これはさらに社会的人間学ないし人類学の方向で検討され展開されるべきであろう。社会人間(類)学的観点の導入と事実の発掘がなされるとき、精

